

顔のない午後



岡田文弘

琥珀色の影

顔のない午後

かぼんの挽歌

だれもが日傘をさして

さびついた季節

伝心機

ハンスの子守唄

ざわめく

地球翁

びいだま

雨の味がした

アメリカ産の味噌汁

行楽

芝生の港

午後の陽のひかり

鶏頭

泥だらけの男

鋤焼

ウキスキー中毒

おちやづけソング

メイヨ・トンプソン

白滝

コーヒー・ピープル

アンテイク

日が落ちる

花

カンザスシティ・トレイン

温泉

安心

ヘチマ

くだらない木

たおやかな休息

耳の中

独居

機械

怪獣

もろきゆうに捧ぐる

空の底

アホウドリ

3 文小説抄

琥珀色の影

かつてわたしとあなたは
大きな大きな蛾の翅からこぼれた
小さな小さなりんぷんの一片だったらしい
かつてわたしとあなたは
小さな小さな一つの約束であつたらしい

顔のない午後

一枚の記憶

それはハンカチのような空をちぎって逃げた
しおからとんぼの帰り路

カタチあるものは

どこに溶けてしまったのか
ぽっかりと穴の開いた虫歯も
町のはずれでうずいている

たべもののように

つつましく たおやかに
あのないとつのある家で
黄色い花を育てていた

ジュースの粉を

時計の中にかくしていた
そんなぼくの内側で
虫歯がうずくまっている

潜水夫が

雲の下を横切ってゆく
ぼくはそれを見ていた
夏が終わるのを知った

ちぎれた空

顔のない午後の喧噪

かばんの挽歌

コップの中に
トマトをしずめて
ぼうしの裏に
カカトをかくして

それはちようど
病気みたいなものなんだ
なんて
どこかで聞いた言いわけを
くり返す

きみは
油の切れたロボット
ぼくはきみのネジをぬきとり
満月の夜 あ空にかざしたい

満月の夜
きつとそれは魚の小骨みたい
またたいて きらめいて
ぼくはどうしようもなく
かなしくなるのだろう

コップの中にしずんだトマト
ぼうしの裏にかくれたカカト
生まれたばかりの子どもらにとって
はじめての秋だね

だれもが日傘をさして

窓辺で上手に

プラタナスを育てている

そのあいだをかくぐり

ぼくは市営プールに行く

ゼンマイが切れて

時間がとまった

四角い箱を背負って

ぼくは中央公民館に行く

レモンのジュースを飲み終えたら

ストローを望遠鏡にして

どんな星が見えるのかな

きつとななめに立っている

きみの姿が見えるのだろう

ぼくはそれが好きなんだ

ちようど石を拾うみたいに

ぼくはそれを続けるんだ

ぼくはそれが好きなんだ

まるで石を拾うみたいに

ぼくはそれを続けるんだ

さびついた季節

ぼくは自転車さ

田舎道をたぐり寄せて

きみのところまで行くよ

まるで誰かのいたずらみたいに

空がくずれて灰になつて

ぼくは自転車さ

チェーンのはずれた自転車だよ

伝心機

電信機

かかえて公園へ
アスファルトのにおい
街角は夏野菜の色

ぼくらは

何だってできるさ

さるすべりの木の下では

何にもできなかったけれど

団地の路地を抜けて

砂ぼこりをまといながら

かすれた声は遠くなる

あて名のないハガキにも似て

まばたきするうちに

茶わんも庭木もいわし雲も

みんなみんなまざり合って溶けてしまった

それは心地よく晴れた空のまぼろし

公園にかくしておいた秘密のまぼろし

こっそり見せてあげようか

こっそり見せてあげるよ

月と日のはざま

雲がとぎれた場所で

ハンスの子守唄

空に

ヒビが入って

その肩ごしに見えた街の
輪郭

ぼくは自転車に乗って

どこまでも

きみと

自転車に乗ってどこまでも

まるでおそれを知らなかった

あの頃みたいに

自転車に乗って

どこまでも

市営プールまでの近道をいそぐよ

かげろうにだまされて

セミのしがいを横目に

ぼくらはつつまれている

夏の終わりに

ヒコークは

ピラを撒きながら飛び去って

空に

ヒビが入って

日々の所在なさに

街の輪郭が

くずれてゆく

そのひと時が

なんだか心地いいんです

見覚えでも

あるみたいに

ざわめく

日々の隙間を
すり抜けながら街を行けば
もどかしそうな
ひとびとの営み

知っていたことも
知らなかったことも
全部、融解して
駅前の雑踏がさびしい

そんなざわめきが
ぼくたちをまた少し弱くする
どんな顔つきで
笑っていればいいのか

地球翁

顔をならべて

石をかじる

夏の屋台は

リコリスを売る

かすかにゆれる

摩天楼の影

電話をかけても

どうにもならない

あなたのふりして道を歩けば

目に映るものも違ってくるかな

風と月と

それから私と

地球を回す

あのおじいさんと

すこしだけぼけてる

あのおじいさん

びいだま

長い間眺めていた
窓の外を ぼくは長い間
いろんな色のイキモノたちが
どんな風に昼寝するのか知りたくて
いろんな形の音符たちが
どんな風にうそをつくのか確かめたくて

波のように動きまわって
日が暮れるまで遊んでいようよ
そんな風にぼくはすごしたいんだ
海のうらがわ 星のすみかで
ぼくは記憶をかたづけろんだ

だから今だけ
傘もささず 雨の通りを歩く
ぼくは雨の通りを歩く
傘さす人たちの間をすり抜けて
だから今だけ
ぼくはそれをやってみている
ラムネのビー玉かざして
雲の切れ目を数えながら

雨の味がした

今朝目がさめると
すこし熱があつたので
ぼくはスキマ風のスキマにもぐりこむ
きみの向うには窓があり
窓の外では雨が降り
電信柱が空をささえていた

すこし熱があるみたい

やりすごした日々が堆積して
部屋はコーヒーのような匂いがしている
きみはコップに水をくんで来て
ぼくに渡す

そしてきみは黙りこむ
ぼくもまた然りだ

雨はまだ止まない
ぼくは布団にくるまったままで
息をひそめている

そんな時

いろいろと思いだしてしまふんだ
思い出さなくていいことばかり
いろいろと

きみの肩は遠ざかり また近づいて
今日は雨だから

散歩している犬たちもいなくて
ことのほか表はしずかで

あの子らの鳴き声がこいししいと言う
ぼくはコップの水を飲み干す
雨の味がした

アメリカ産の味噌汁

障子を張りかえる

その作業、一つ一つの所作

拡散してゆく行為の中で

たばこに火もつかない

魚たちは

絶妙な角度で傾いている

行楽

ひとふで描きの貝の化石が

ひとふで描きの山のとっぺんに埋まっていた。

谷間を旅する旅人たちは

切り紙細工のラクダを、とても上手に乗りこなす。

ぼくは

茶店で弁当を食べている。

色とりどりの豆料理だ。

山の空気とまざくりながら食べると、なおうまい。

茶店にはたくさんの方が訪れる。

干しトマトだとか、サンマ製のキーホルダーだとか、

そういったお土産を買うのだろう。

行楽の季節、弁当を食べ終えたら

ぼくはもう少し西へ足を伸ばしてみよう。

芝生の港

バーベキュー大会が終わったら
みんなで船に乗りこんで

この風ならば

どこまでも行けるよ

サッカーボールけとばして

どこまでも行くさ

アルミホイールにおむすびをつつんで

きみの犬を舐先に乗せて

おもかじ、

いっばい！

午後の陽のひかり

半壊したアパートが
雲一つない空の下
背を伸ばしすぎて枯れた樹木のように
忘れられて立っている

ここには「ぼく」も「きみ」もない
はじめから そんなものはなかったのだ
風に吹かれた記憶の残骸
絵画的な静けさ

流れてゆく水は
おさない蛇のように
たおやかにのたくり
そして消えてゆく

たなびく煙は山となり
とほうもない所在なきが
音もなく そこに在った
さようなら、茫洋と広がるこの場所
心地よい、午後の陽のひかり

鶏頭

まるでニワトリのトサカみたいなので
その花は「鶏頭」と呼ばれている
ぼくはあまり好きでない
単色の風景 田舎道の曲がり角に
こいつがけばけばしく咲いていると
思わず足がすくんでしまう
目に焼きついた深い赤色が
奇妙な胸さわぎを引き起こすのだ
そんなに燃え上がるような様子で
行く手をふさがなくてくれ
しずまりかえった秋の昼下がりに
ありったけの力をこめて
ニワトリのトサカが咲き乱れている

泥だらけの男

木の葉を食み

樹液を飲む

喰って喰えないキノコはないのだ

ただ 生きのびるか

死ぬかの違いだけだ

おれは一万年前に死んだ

そしていまだに死に続けている

おれに降りそそぐ日差しをさえぎるな

いきものたちよ

鋤焼

わたしはスキヤキを食べている
パラフィン紙のような肉と、痩せた春菊と
毛細血管を思わせる糸こんにゃくと
信じられぬほどアクが出やがるので

わたしは必死にそれをすくっては捨てている
外は雪

室内に流れているのはジャーマン・ロック
しばれる夜のことだ

友だちが割したを入れ

わたしは水をさす

関東風スキヤキにはいまだに馴染めない

わたしは本日三コ目の卵を割り

小鉢の中でかきまぜる

よほど卵好きなんだなと

友だちは愉快そうに笑う

返す言葉もなく

わたしは卵に肉をからませて

十年一日のごとく食み続ける

外は雪

しばれる夜のこと

ウキスキー中毒

ウキスキーの味が好きなんか
酔っ払った時の気分が好きなんか
見極めてやろうと思つて今日も
昼間からウキスキー飲む

そのまま 知らないうちに眠り込み
そして いつの間にか目覚める
その時感じるけだるさを
ぼくは好きではないはずなのに
どうせ また飲むのだ

おちやづけソング

まさかこんなところまで流されて来たとは
しなびたかいわれ大根を

古新聞でつつみ

無人駅のベンチで

だれを待つでもなく

自分の骨が運ばれてゆくのを見送る

ギターの弦に毛糸をからませて

モノクロームの音像の中

月夜の石拾い

こわれた地球のかげらに腰かけて

海苔のおちやづけを食べる

宇宙空間はたいへんに寒いので

海苔のおちやづけが美味くてたまらないのだ

メイヨ・トンプソン

午後十時

片田舎、古びた家の中

メイヨ・トンプソンの音楽を聴いている
猥雑で

それでいて優しい

メイヨ・トンプソンの音楽

毒キノコを干物にして

焼酎に漬けたまま蔵に隠し

時を経てから出して来て

一人ちびりちびりと飲むような

そんな気分で

メイヨ・トンプソンの音楽を聴いている

CがKになっても

KがCだった頃も

よれよれで

勝手きままな

ざらざらとした質感

もしかこういうものが この世に無かったならば

ぼくはとっくに死んでいたことだろう

午後十時

片田舎、古びた家の中

メイヨ・トンプソンの音楽を聴いている

白滝

爛酒もなしに
こんな寒いところへ居たらば死んでしま
空にうかんだオデン種
通りすぎる記憶

かなたに
何かが見える
何も見えない
くつが欲しい
底がすりきれてしまうまで
履いてやりたい

電気を消しましょう
明日は早いから
白滝みたいに眠りましょう
おやすみ

コーヒー・ピープル

おれが行ってしまったあと
モノクロ写真のコーヒーショップで
おまえはあいかわらず
名前もない死がいを抱いているのか
運のわるい数、こわれた腕どけい
うらぎられたとおもうのか
おまえは肩をすくめる
猫たちとはうまくやっているの、と
あのバス停のそばで
おれたちは約束をはたし合う
川が流れる場所まで
人びとを運ぶバスを待ちながら
からだの力をぬき、目をして
そのままおき去ってしまうさ
それがいつものやり口、古典的手法
おまえもすでに知っているとおり

インサイドだとか、アウトサイドだとか
メインだとか、サブだとか
おまえの鍋でシチューにして
あまりは猫にくれてしまえよ
おれは一分間に二百回転していて
花売り娘の身の上ばなしも聞こえない
これ以上なにか増やしたって
どこへも行けなくなるだけのこと
おまえはどん欲に生きればいいが
あさましくはならないほしい
その金属みたいで間ぬけな心臓を
だれにも売りわたさないでほしい
スモッグの空を

摩天楼が突きやぶれないならば
コーヒーショップに戻って
一から考え直せばいいだけのことさ

それは悪くないとおもう

誓って、それは嫌いではない

だからバス停のそばで

カカシみたいに立ちつくしている

バスが来まいが、待ち人が来まいが

どうでもいいことさ

おまえもすでに知っているとおり

それがわりと気に入っているのさ

おまえもすでに 知っているとおり

アンティーク

花柄の調度品

宮廷仕様のドレスを着た

まつ毛の長いマネキンたちに

囲まれて

十八世紀に作られたソファーに

しどけなく坐っている

枝毛まじりのいたんだ黒髪

ぼろぼろのジーンズに小ぎたないTシャツ

すっぴんで

静かに本を読んでいる

あなたは

うすよごれていて

うつくしい

日が落ちる

空夕焼けてた

おれ座りこんでた

風も水も流れてた

流れた先で消えてった

おれ夕焼けてた

おれ西の空に沈んだ

おまえのこと思い出し

空にうかんで消えてった

空夕焼けてた

おれ座りこんでた

おまえのこと思い出し

おまえのこと思い出し

花

いつ死んだのか
おれにもわからない
ただそれが思いがけぬほど
静かな時間だったことだけは確かだ
まるでずっと前からそうしていたように
おれは海をただよい
風に遊んだ
時計のねじを巻くようにして
おれの折れ曲がった足の先を
蒸気機関車がものすごいスピードで走り去って行った
今になって初めて すべてが許せる
今になって初めて おれは生きていられるのだ
ぼろぼろになった空は
ちようど地べたに溶けこんで
あとには何も残さずに
地球の上のありとあらゆる植物が
ありったけの無意味さをこめて
一斉に花を咲かした
死んでしまったおれを取り巻いていたのは
四季のどれでもない季節
思いがけぬほど静かな時間だった
おれはずっと
そこにいたのだった

カンザスシティ・トレイン

はじまらないまま

終わっていた

ぼくは老いて

きみは去った

カンザスシティに行けば

すべて片付くらしい

なくしたのも見つかるらしい

ぼくはその言い伝えを

たいせつにポケットにしまいこんで

駅を後にする

そして列車は出て行った

はじまらないまま

終わっていた

ぼくは老いて

きみは去った

かわいた空の下を

列車が走りぬけて行った

温泉

あんたはもう

この次に生まれた時のことを考えている

その指先からくずれ落ち

ひとを一人にさせるだけのこの市街地で

何事もなかったように

消えてしまう日

(それは、そう遠くないことらしい)

その日が来るのをまんじりともせず待っている

それは仕方のないことなのだろう

だがあんたには是非とも

覚えておいてほしいことがある

あのぼつかりと空いた穴のような

暑さとも寒さとも無縁だった夏のある日

山に隠された温泉に行ったこと

さびついた鉄橋をわたり

山に隠された温泉を目ざしたこと

どうかそれだけは

忘れないでいてほしい

木立は心地よく湯気に煙り

ごつごつした岩はやさしかった

そのつるりとした手触りの湯の中を

あきもせず泳ぎ回った

そのことだけは

どうか覚えておいてほしい

次に生まれた時こそ

あんたは何だって出来るさ

ただ忘れないでいてほしい

山に隠された温泉で

時間の止まった夏の日の午後をすごしたこと

それだけは覚えていてほしい

安心

もう大丈夫

たとえばあの髪のきれいな娘が

近くで見れば枝毛だらけであつても

もう大丈夫

その枝毛だらけの髪が

むせび泣いていたとしても

もう大丈夫

これ以上いいことも悪いことも

なにもおこりやしないよ

もう大丈夫

ぼくは鉄道模型になつて

収穫祭のうたを唄うのさ

もう大丈夫

きつと大丈夫

たとえあの娘の髪の手が

枝毛だらけであつても

へチマ

きみは台所で

野菜ジュースを作っている

ぼくは冷蔵庫の前

かんでんゼリーの番をしている

サティのCDをかけたいけれど

あいにく友だちに貸している

今年は

へチマでも育ててみますか

くだらない木

そのいっぽんの木は
ただのくだらない木である
くだらない木は地めんから水を吸い上げ
青々と茂った枝葉から放出する
そのくだらない営みを
ぼくはベンチに座り込んだままずっと見ている
気持のよい晴れた日の午後
ぼくは自分の中に沈殿したくだらなさに
まんじりともせず耳を傾けている
それはあるくだらない日の午後のこと
ぼくは空に向けて幹を伸ばしている

たおやかな休息

あなたが鼻をかむ音が
しずまり返った部屋の空気を
ためらいがちに
しかし同時に確信に満ち満ちて
ふるふるとゆらしている
震わせている
ぼくはトートロジーに捉われたまま
書きものをしている
郵便受けは千年前から空っぽで
そこはかとなく
はかなくもあり
とは言えもう少し
このままでもいい

耳の中

耳の中にしのびこんで
息をひそめて耳をすます
ねむり続ける日曜の朝
耳の中にしのびこむよ

なまあたたく、たおやかな時間は
マグカップからこぼれ出して
そっと一さじ砂糖をまぜたら
牛乳みたいな味のひととき

そのけだるさに溶けながら
耳の中にもぐりこむ
そっと耳の中にしのびこんで
何か聞こえて来るのを待つ

耳の中にしのびこんで
息をひそめて耳をすます
素晴らしき日曜の朝
耳の中で夢を見るよ

独居

木星にすじをつけたのは

ぼくだ

土星にワツカをかぶせたのも

ぼくだ

ストープもない部屋で

アーリータイムスの瓶をにぎりしめて

床に接吻しているのもまた

ぼくだ

すきま風で脚がきしむせいで

いつまで経っても起きられない

そんな夜明け

機械

電気で動く
それは電気で動く
コンセントの先から力を吸いこんで
モーターを回し
うなり声を立てる
ぼくは息をつめて
その様子を見守る
青ざめた顔に
汗と笑みを浮かべながら

怪獣

怪獣は倒されてしまった
笑うようにして泣きながら
みにくい姿をさらしていた彼は
ポスターカラーの勇者が放った殺人光線によって
木っ端みじんに爆発してしまった
勇ましいマーチのBGMに乗って
こなごなに碎け散ってしまった
きつと痛かったろうなあ
また正義が勝ってしまったのだなあ

怪獣よ

おれはお前が叩きつぶしたビルの破片の下じきになり
巨大な勇者がポーズを決めているその足元で
だれに看取られることも無いまま血を流している

怪獣よ

お前がかわいそうだ
お前はビルを壊し
俺のようなつまらない人間を殺すくらいのことしか出来なかったのか
弱虫野郎め

お前をそこまで悲しませ
そんなにみにくい姿にってしまった連中を
お前は見出すこともできず
立ち向うことも出来なかったのだ
お前は本当は何を壊したかったのだ
何を倒したかったのだ
お前に涙を流させたのは何だったのだ

怪獣よ

どう思う
怪獣よ

もろきゆうに捧ぐる

手酌は出世しないと言うが
もう別にいいのだ

まずはこの空っぽのコップを

どうにかしたいのだ私は

コップの底にうつる顔が

実にうす気味悪い

私はこんなうす気味悪い人間は嫌いだな

味噌よ

胡瓜よ

お前たちが愛おしい

空の底

にごった空の底
ねじれたうでをかざし
きみは目覚めたまま
海鳴りを聴いている
キレイな音の中
中身があふれてゆく
意識の紐がほどけて千切れ
わずかな記憶が散らばる
静脈の内がわで身を浸すのは
すき通っていておぞましい想い
きみは大きく目を開いて
まばたきもしないし 何も見ない
にごった空の底
木立は太陽を覆う
ぼくはせむし男
街を歩くのが好き
部屋で笑うのが好き
テレビの砂嵐は
胎児が聴く音と似ているらしい
子宮の中には
荒涼たる砂漠が広がっているらしい
ぼくは知らない
どうやって心臓が脈打ち
月が潮をひきつけるのか
夢見る瞳の色は古めかしい洋館の窓の奥
気狂いに倣えば
どうとでも出来るさ
ぼくは空をにごし続ける
みんなが好きでたまらないから
どうでもよくなるほど

いつかは
それでいいと思える

答えは 冗談のすきまにまぎれて
砂になって流れてゆけばいい

ほこりまみれの道路
歩き続けるきみは
いつかヘッドライトだけの車に轢かれて
何もできずに押し潰される
振り返った瞬間
真っ白な光にメクラまされて
前のめりに倒れ伏す
まぶたを閉じようと手を動かすが
潰れた顔なのだから
もう何もすることはないと気づく
夜の色は朝の陽ざしに似て
たおやかで それでいて突き刺さってくる
とりまく空気は懐かしくて
そして暖かい

しばらくして
ふいにきみは起き上り
潰れた自分を脱ぎ捨てて
何ごともなかったかのように歩き去る
うまくやっただんだ いつの間にか
だれもが通る路なのだけれど
そしてきみが行ってしまった後で
ぼくはきみが脱ぎ捨てた体の傍に立ち
ぼろぼろ涙をこぼすのだ
うるおいのない涙のつぶ 乾燥しきった小さな球体
ぼくの目からこぼれてゆく
夜の色は朝の陽ざしに似て
ぼくたちがにごした空の底を突き抜ける
それがすべてなのか
こんなことを夢見ていたのか
だけどいつかは
それでいいと思える

アホウドリ

これだけは
ぜがひとも

言っておきたかった

言っておくべきだった

言っはならないことが

山積みになってぼくの肺を押しつぶし

今日もまた黙りこくって

一日が終わる

宵闇は思ったよりも薄暗くて

口が微かに動いたところで

見えるはずも無い

空であるとか星であるとか

花粉まみれの花であるとか

そうしたもの眺めていればよかったのに

阿呆鳥が飛んでゆく

夕陽を追いかけて行く阿呆鳥

海の向こうに消えた

サヨウナラ

ぶざまだったけど

カツコよかったぜ！

3 文小説抄

板チョコ

- ① タバコケースが落ちていた。
- ② 一瞬、トランプのババのようにも見えた。
- ③ 拾ってみたら、板チョコだった。

パンの種

- ① 街はずれの無人パン屋に行き、パンの種を買ってきた。
- ② きみどり色の庭にその種を撒くと、たちまちパンの木が生えて来た。
- ③ さすがは無人パン屋の *Self Survival* とぼくは賞賛しながらパンの実を収穫して回った。

またしても泥棒に遭う

- ① ぐにゃぐにゃしたヨウカンが、ぼくのサイフを盗んで逃げだした。
- ② その逃げ足たるやミュンヘン・オリンピック出場選手なみに早かったが、駆けつけたポリスマンやポストマンがみごとに取り押さえてくれた。
- ③ つかまえてみると、そいつはヨーカンではなくて、あなたの弟だった。

世界の歴史

- ① 中華鍋の底でキャベツをいためながら言った、「結婚しよう」と。
- ② ちょうどその時、ナポレオンはロシアで旗を燃やしていた。
- ③ カエサルはと言うと、穀物を値切っていた。

大人

- ① 「いいセロハンが入ったんですよ」と店主。
- ② 「ハタチを過ぎるたのなら、こういうものの良さが分かるようにならないと」
- ③ そう言って、ビール瓶いっぱい詰めたセロハンを売りつけてくる。

運命論

- ① フランスパンとフライパンが恋をした。
- ② 幸福な誤解にもとづいて。
- ③ 最終的には不幸になった。

玩具

- ① あのガチャガチャした晴れ空の部品は何？
- ② 油を差せば星が出るの？
- ③ そんなら、もう話をしない！

ハンペン

- ① ある夜、ねむれないので外を散歩していると、ハンペンに出くわした。
- ② こんばんは、と言ってハンペンは帽子を脱いだ。
- ③ 存外に礼儀正しかったので、ぼくは少々びっくりした。

正体

- ① ある夜、明治通りを歩いていると、妙に尾を引く歩き方の男とすれ違った。
- ② もう一度その男を見ようと振り返ったら、もう消えていた。
- ③ あとからよく考えてみると、彼はホーキ星だったのだろう。

紐育

- ① 帽子をかぶろうとしたら、その中にスッポリ入ってしまった。
- ② なんとか抜け出すと、そこはニューヨークだった。
- ③ というてんまつをポリスマンに話したのだが、てんで信じてもらえない。

英語で歌うドイツ人たち

- ① 「mayonnaise」という言葉で終わる本をポケットに入れた。
- ② 水筒には緑ブトウ酒を、バスケットには鴨サンドウィッチを詰め込んだ。
- ③ さあ、凍った河へピクニック！